期待される授業に関するマップ調査研究
―初年次生と専門生の比較―

衛　　蕾・林　伸一

1．はじめに

田中（2007＝2008）は、「『教育』とは意図的、計画的な『ひとづくり』の作用であって、近代の学校はもっとも洗練された『教育』が実施される場所であり、わけても『授業』はその典型的な役割を担っています」と指摘している。「授業」は単に知識を教えたり受けたりする場所ではなく、人づくりの場所でもある。教師と学習者を結び付ける「授業」は「教育」の重要な要素だと思われる。

現在の大学では、教育目標を達成するために、コースデザインやカリキュラムデザインを通して、教育内容の計画を順序だてて編成していく。教師も授業のための教案を作る。しかし、こういった授業の多くは学校側、あるいは教師側が捉えた要素によって組み立てられている。実際に、教師側が予想した教育成果は、学習者によって測られる。学習者にとってどのような授業が高く評価され、期待されているのかは授業改善の鍵を握っていると思われる。

特に、現在の大学では、学習者が単位を取得するために、楽な授業を選択してしまう傾向が多く見られる。授業に参加しなくても、学期末に他人のノートをコピーし、試験に通って単位さえもらえばいいと思う学習者もいる。しかし、学習者が本来期待している授業が行われたら、学習者の参加意欲が増し、大学の授業の活性化が期待できる。

2．研究の目的

本研究では、山口大学人文学部に在籍している日本人学生に「いい授業とはどんな授業か？」を問うアンケート調査を行った。そのデータを分析することから、実際に学生がどのような授業を期待しているかを明らかにしたい。特に、初年次生が受ける「基礎セミナー」と二年生以上の専門生を対象とした日本語学の専門科目において受講者が求める授業観の違いを比較し、検討したい。「基礎セミナー」はもともと「日本語論述」といった科目名が構想段階で提起され、初年次生の読み書き能力（literacy：リテラシー能力）の向上が目標に掲げられていた。初年次生と二年生以上の専門生との授業に対する期待の相違を検討したい。

3．先行研究

神奈川工科大学（2005）『教育開発センターニュース』は、「より良い授業をめざして」を特集しており、高く評価された授業のポイントを討論形式で検討している。討論会では、教師が自分の授業はどのような項目で評価が高いかについて話題を提供している。その項目としては「総合評価」「刺激・興味」「内容の理解」「黒板の文字」「配布資料」「説明の仕方」「目標の明確さ」

「声の大きさ」「視聴覚機器」「授業の準備」などが示され、様々なコメントが述べられている。

法政大学ＦＤ推進センター(2006)『第１回ＦＤ研究会報告』は、「教員の考える『いい授業』・学生の考える『いい授業』」をめぐって、検討している。教員の考えるいい授業としては、「Ⅰ．目標を設定する」と「Ⅱ．目標を達成するために(手段)」の２項目が含まれている。その一方で、学生が考えるいい授業には、「Ⅰ．進め方」「Ⅱ．話し方」「Ⅲ．評価」の３項目が含まれている。

林・衛（2010）は、「いい日本語教師とは?」のマインドマッピング（mindmapping）を応用した調査を行ない、中国人学習者と日本人がそれぞれ求めるいい日本語教師像について比較し、検討している。調査結果によると、「授業」カテゴリーが第一項目となっていて、「分かりやすい」「授業内容」「雰囲気」「教授法」「対話重視」などのコード化がなされている。

４．研究方法

本稿では、ワイコフ（Wycoff, J, 1991)、ブザン（Buzan, T, 1993=1996）らが提唱したマインドマッピングをヒントにしたアンケート調査（以下、マップ調査）によって受講者からのデータを集めた。マップ調査の自由記述欄から得られた回答を質的研究方法の一つであるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(grounded theory approach)を応用した概念のコード化(coding)とカテゴリー化を行い、談話分析し、検討した。

５．「いい授業とは？」のマップ調査

本稿では、日本人学生が期待するいい授業を探るためにマップ調査＜別添資料：アンケート＞を行った。マインドマッピングとは「心の地図」の意味であり、換言すれば「頭脳の地図を描く」ということである。具体的には、一枚の紙の中心に、テーマ（あるいはアイディア）を描いて、それに関連する様々な情報、発想、アイディアなどを、枝を伸ばすように、放射状に次々と描（書）いていく方法をとる。「いい授業とは？」を中心テーマにして、線の先に思いつく言葉や表現を書き入れる形でマップ調査を実施した（図１参照)。

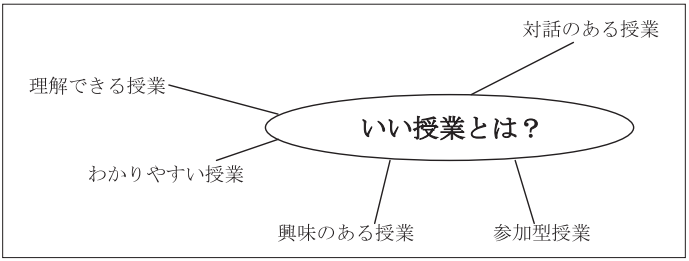


図１．「いい授業とは?」を中心概念としたマインドマッピングの例（日本・10代・女性）

佐々木（2008）は、中国と日本の「鬼」についてのイメージの差異を研究するため、マップ調査法を採用している。陳（2009）は、中国語と日本語の同形語「先生」を中心テーマにして、その意味機能の異同分析のためにマップ調査を行なっている。許（2009）も、中国と日本の文化イメージの差異の比較研究の中で、マップ調査法を利用している。

2009年10月－12月に、山口大学人文学部2009年度後期の「基礎セミナー」に参加した初年次生80名と「日本語学講読」「日本語学演習」「日本語学特殊講義」（以下、専門日本語）に参加した2年以上の専門生82名にマップ調査を行い、自由記述を求めた。

以下に具体的なアンケート回答者の内訳と調査結果及び分析を示す。

５－１．「いい授業とは？」アンケート調査結果

５－１－１．アンケート回答者の内訳

＜表１＞授業参加者内訳　（単位：名）

基礎セミナー	専門日本語	合計
80	82	162

＜表２＞参加者性別内訳　（単位：名）

女性	男性	合計
131	31	162

注：(1)【　】内は出現度数、【　】のないものは出現度数1を表す。「実数」はコードごとの出現度数、「比率」は各カテゴリーの総件数に対する実数の百分率（%）を表す。なお、具体的な回答内容としては、紙幅の関係から、全ての回答内容を挙げられなかった。出現度数の高い内容を示して、省略部分は「…」で示す。

(2) 表の中央には各コード名を示し、コードの枠を分界線として、左側は「基礎セミナー」の回答で、右側は「専門日本語」の回答を対照的に示した。また、各カテゴリーの出現件数を表の一番下の欄に示した。

(3) 基本としては、コードと表の並び方は、基礎セミナーの回答数を基準として出現件数の多い順に並べた。従って、コードごとに対比的に表にしたために、専門日本語の回答の場合には、出現頻度順にはなっていない並び方もある。

(4) カテゴリーに分類できないものは、「その他」に入れた。分かりやすくするため、「その他」の表を他のカテゴリーと違う形で区分した。また、「その他」のカテゴリーには、出現数のみを示し、比率は示さなかった。

５－１－２．各カテゴリーとコードの区分

全体として、アンケートの集計結果を５種類のカテゴリーに分類した。その分類は「教授法」カテゴリー、「授業内容」カテゴリー、「雰囲気」カテゴリー、「教師」カテゴリー、「その他」である。各カテゴリーにはそれぞれのコードが含まれている。

また、類義語または関連表現の語群のうちの出現度数の多いものをコードとした例が多い。例えば表５に示した「楽しい【19】退屈しない【4】笑顔・遊び心・教室のテンションが高い」などの語群は「楽しい」とコード化した。また、「明るい【3】積極的【3】授業、教師、生徒全体の雰囲気が明るい」などの語群は「明るい」とコード化した。

ただし、必ずしも出現した語群の中からコード名を選定したわけではない。例えば、表４の「興味が持てる【36】授業を受けたいと思える【9】勉強への意欲がわく【6】やる気【3】…」などの語群には「動機付け」というコードを付した。「興味が持てる【36】」の中で、「興味が持てる・興味が湧く・興味をひく・興味を持たせる」などの語群は、意味的に共通しているコードとして、「興味が持てる」にまとめた。また、比較しやすくするために、各表に表した比率

をグラフにして示した。

５－２.「教授法」カテゴリーの分析

＜表３＞　教授法カテゴリー

基礎セミナーの回答内容	実数	比率	コード	比率	実数	専門日本語の回答内容
分かりやすい【43】例がある【3】先生の教え方が上手…	55	26.3	分かりやすい	21.3	42	分かりやすい【31】難易度が適切【5】教師の教え方がうまい【2】…
コミュニケーションがある【9】…	48	23.0	対話	26.9	53	対話のある授業【12】発言【8】…
板書が見やすい【9】図、スライド【5】ノートとりやすい【4】…	30	14.4	視覚効果	10.2	20	板書が見やすい【7】板書がきれい【3】板書がある【3】文字がきれい【2】…
生徒参加型【16】一方的ではない【3】生徒の自主性が育つ・能動的…	28	13.4	参加型	19.8	39	一方通行ではない【16】参加型授業【14】主体性【2】能動的…
考えさせられる【9】考える時間がある【4】多様な見方の提供…	17	8.1	考えさせる	10.7	21	考えることができる【10】自分で考える【7】今までにない考え方をする
メリハリがある【5】適度な緊張感がある【2】段階を踏んだ授業…	12	5.7	めりはり	4.6	9	めりはりがある【5】時に笑い、時にしんけんにとりくめる授業
ちょうどよいスピード【2】適度な授業時間・進度が丁度良い…	10	4.8	時間配分	2.0	4	計画性がある【2】授業を進むはやさが適切・時間配分が適切…
教材の使い方が良い･教材がいい･さまざまな資料等にふれる…	7	3.3	教材・資料	3.6	7	板書だけではなく資料も使う【3】適切な教材・プリントがある…
生徒数が適度【2】	2	1.0	その他	0.5	1	少人数制
基礎セミナーの教授法カテゴリーの総件数【209】				専門日本語の教授法カテゴリーの総件数【197】		

＜表３＞の「教授法」カテゴリーをグラフに表すと次の図２になる。

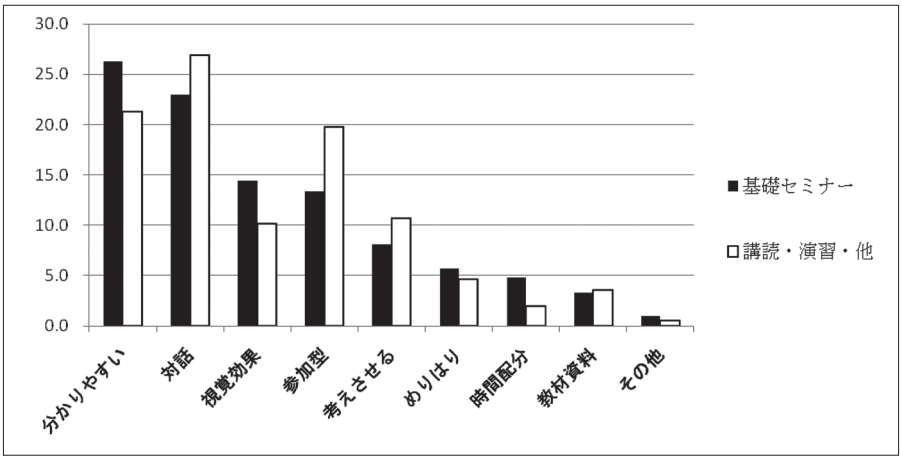


図２.「教授法」カテゴリー

＜表３＞と図２に示したように、「分かりやすい」コードは、基礎セミナーが首位であるのに対して、専門日本語は第２位である。両者とも授業の分かりやすさを求めていると言える。「対話」のコードに関しては、専門日本語が26.9％で、首位を占めており、基礎セミナーは23.0％で、第２位となっている。両者とも2割強の比率を占めているため、「対話」のある授業が求められていると言える。

しかし、「分かりやすい」と「対話」の二つのコードに関しては、基礎セミナーと専門日本語の順位が逆転している。基礎セミナーに参加する初年次生にとって、「分かりやすい」授業は「対話」のある授業より重要だと考える学生が多い。初年次生にとっては、自分の意識や興味と関係なく、取らなければならない必修の授業として基礎セミナーがある。また、大学の授業は高校の授業とどう違うのか、参加する授業の内容を十分に理解できるかどうかという点に不安があると推測できる。さらに、理解できない授業であれば期末試験に合格できるかどうかという不安もあるだろう。したがって、初年次生にとって、「分かりやすい」授業が一番重視されていると考えられる。

二年生になってから、自分の好きな授業を選び、初年次生のように無理やり授業を取らされる場合より、授業に選択的に参加し、楽しむことができる。そのため、二年生以上の専門生は、対話があり、盛り上がる授業により強く期待と関心が集まると考えられる。

「対話」コードの中で、「発言」や「発表」の記述が得られた。授業で、教師の話を学習者がただひたすら聞くだけではなく、自らも教師から出された課題について発言し、発表することによって、対話のある授業が展開される。

「視覚効果」コードに関しては、両者の間に大きな差が見られなかった。しかし、基礎セミナーの方が、上位3位に来ていることから、学習者が授業の分かりやすさや対話のある授業の他に、板書の見やすさや図、映像などの利用にも大いに期待していることが分かる。板書に関してはノートを取るのにちょうどよい速さや見やすさが求められており、特に試験のある授業では学習者にとって、重要な要素であろう。板書、図や映像などは授業を分かりやすくするための手段の一つだと考えると、首位の「分かりやすい」コードにも繋がっている要素である。

「参加型」コードに関しては、両者の間にも大きな差が見られなかったが、基礎セミナーで第四位であるのに対し、専門日本語で上位３位となっている。専門日本語の方が一方通行の授業より能動的で、参加できる授業をより強く求めていると考えられる。

上記の「対話」コードと同じく、「参加型」の授業も、「対話」のある授業も、学習者が積極的に授業に取り組み、能動的になっている。漫然と教師の話を聞くだけの授業より、自ら参加できる授業の方が、学習内容が記憶に残りやすく、時間が経っても、授業でどのようなことを学んだかも想起しやすいと思われる。

授業中で、教師と学習者のコミュニケーションによって、学習者の意見や考えが直接教師に伝えられ、理解度の確認もできると考える。また、学習者同士でコミュニケーションを取ることにより、「他者理解」もできるだろう。対話したり、意見を交換したりして、自分の意見を他の人とシェアし、新しい考えを持ったりすることが出来るから、視野も広がって為になると考えられる。話し合うことによって、自分では上手く表現できない所も相手と協力して、出来るようになる満足感も得られるだろう。また、他人と議論し、自分がどのような考えを持って

いるのかを具体的に、視覚的に知ることができ、「自己発見」にも繋がる可能性がある。

「めりはり」「時間配分」の二つのコードの間に大きな差は認められないが、基礎セミナーの方が若干上回っている。授業に「めりはり」があるというのは、授業内容がどこからどこまでしっかり分かるか、学習者が教師の話を聞く態度の変化に関係しており、内容の理解にもつながり、いい授業を作る上で大事な要素であると考えられる。

「考えさせる」コードに関しては、両者の間に大きな差異はないが、専門日本語が基礎セミナーより若干上回っている。考えることが興味を持たせる要素でもあり、理解するための前段階とも考えられる。

「教材・資料」コードには、基礎セミナーが3.3%で、専門日本語の3.6%とほぼ同等の比率を占めている。配布するプリントが資料としてしっかりできていて、教師がその特性を生かして使うことが、分かりやすい授業に繋がるだろう。

５－３.「授業内容」カテゴリーの分析

＜表４＞　授業内容カテゴリー

基礎セミナーの回答内容	実数	比率	コード	比率	実数	専門日本語の回答内容
興味が持てる【36】授業を受けたいと思える【9】勉強への意欲がわく【6】やる気【3】次の授業が楽しみ…	65	46.8	**動機付け**	33.3	49	興味が持てる【25】やる気【7】勉強意欲がそそられる【7】待ち遠しい【2】自分で何か調べたくなる…
知識が増える【5】内容が濃い【5】たくさん学ぶことができる授業…	19	13.7	**知識**	21.1	31	知識が深まる【8】知らなかったことを知れる【5】新しい知識【5】…
為になる【7】役に立つ【3】学力向上につながる【2】成績が上がる…	15	10.8	**役立つ**	16.3	24	為になる【12】役に立つ【7】自分の力になる・実用的な内容もある…
雑学も取り入れる【3】余談がある【2】雑談も少しまじえる【2】…	14	10.1	**雑談**	4.1	6	たまに雑談する【3】雑談などもある・先生の雑学を教えてもらえる…
新しい発見がある【4】視野が広い・先生も先生で新たな発見ができる…	7	5.0	**新発見**	11.6	17	新発見がある【7】視野が広がる【3】きづきがある【2】新しい視野…
筋が通っている【2】要点がまとめてある・目的がはっきりしている…	7	5.0	**目的・目標**	7.5	11	目標が明確【7】筋が通っている・きちんと指標がある…
疑問を残さない・スムーズに分かることも大切だがたまに疑問も持てる	2	1.4	**疑問**	2.7	4	疑問が解消される【2】疑問がでてくる・疑問が解決できる
記憶に残る【7】内容が難しくなく、簡単でもない・充実した時間…	10	7.2	**その他**	3.4	5	授業外学習を生徒が積極的にやっている・内容が詳しい…
基礎セミナーの授業内容カテゴリーの総件数【139】				専門日本語の授業内容カテゴリーの総件数【147】		

「動機付け」コードは、前掲の「教授法」カテゴリーに入れても良いと思われるが、「授業内容」で学生の興味や意欲を喚起する場合もあると考え、＜表４＞の中に位置づけた。

＜表４＞の「授業内容」カテゴリーをグラフに表すと次の図３になる。

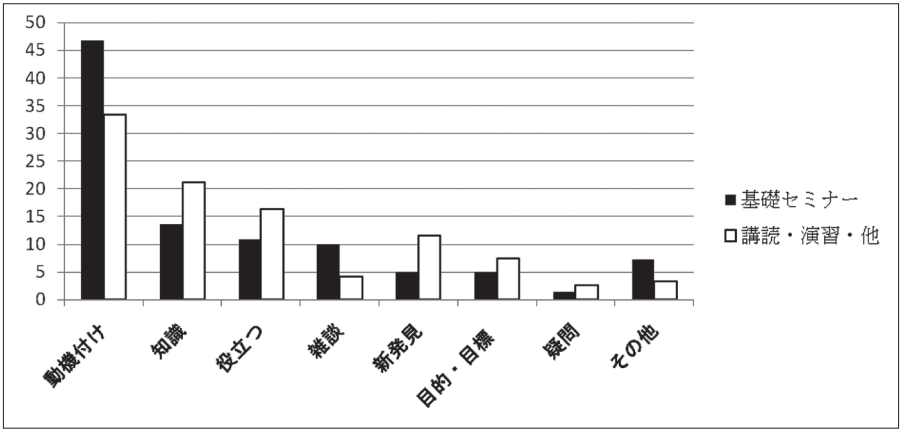


図３.「授業内容」カテゴリー

＜表４＞の「授業内容」カテゴリーに関しては、基礎セミナーは139件で、全体の第２位を占めているのに対し、専門日本語は147件で、全体の中で第３位となっている。基礎セミナーの方が授業内容に対する期待が強いと思われる。

「授業内容」カテゴリーの中では、「動機付け」のコードに関して、基礎セミナーも専門日本語も首位を占めている。しかし、基礎セミナーが46.8％で、専門日本語の33.3％より、13.5ポイント上回っている。両者とも「動機付け」についての評価が高いと言えるが、基礎セミナーの方が動機付けをより強く求めているということが明らかである。

興味を持たせるのは教える側の行動だと考え、初年次生が教師に依存しがちであると考えられる。専門生が自分の興味を持つ授業を選べるからこそ、逆に教師の側から学生への動機付けがそれ程重視されていないとも考えられる。

神奈川工科大学（2005）『教育開発センターニュース』は、「…より良い授業にする為には、まず学生に対していかに『学習意欲』を刺激し、そして『学習意欲を持続』させる為には『動機づけ』が非常に大事になってくる」としている。「動機付け」は学習者の授業への参加度にも強く関係しており、授業を効果的に進める重要な要素だと考えられる。

「知識」と「役立つ」の二つのコードに関して、両者の間に大きな差異は見られなかった。コードの順位にも差はないが、専門日本語の方が、基礎セミナーより比率が若干上回っている。専門生は、授業で何を学べるのかを初年次生より重視していると言える。

二年生以上の専門生が、授業を通して自分の力になる知識の習得や役に立つ有益な授業をより強く求めていると思われる。具体的な回答内容には、「1つでも多く知識を得ることができる」のような記述が見られ、学びたいという願望が強く表われている。

「役立つ」コードでは、基礎セミナーの回答に、「学力向上につながる」や「成績が上がる」のような学力や結果に着目している記述が得られた。

「雑談」と「新発見」の二つのコードに関しては、両者の間に大きな差が見られなかった。しかし、「雑談」コードは、基礎セミナーが第４位であるのに対し、専門日本語が第６位である。

逆に、「新発見」コードは、専門日本語が第４位であるのに対して、基礎セミナーが第６位になっている。両者とも順位に2位の差があった。初年次生の方に授業中に適度に雑談を取り入れて欲しいという願望の表われが見られた。その一方で、二年生以上の専門生は、新しい発見が出来、視野が広がる授業を期待しているようである。

「雑談」コードに関して初年次生より専門生の比率が低いのは、知識に価値を置いていることにも繋がっているであろう。無駄話よりしっかりした内容を望んでいる学習者が多いようである。一方で、初年次生は雑談や余談を取り込んでいる授業の方がめりはりがあり、退屈しないと考えているようである。

また、基礎セミナーの回答には、「先生も先生で新たな発見ができる」のように、授業を通して、学習者だけではなく、教師側も自ら発見できるという回答も見られた。

「目的」「疑問」の二つのコードにおいては、両者の間に大きな差が見られなかった。

５－４.「雰囲気」カテゴリーの分析

＜表５＞　雰囲気カテゴリー

基礎セミナーの回答内容	実数	比率	コード	比率	実数	専門日本語の回答内容
眠くならない【15】・集中できる【12】学生全員が真剣に聞いている【4】時間を忘れぼっとうする【3】…	42	33.9	**集中**	37.6	59	集中できる【31】眠くならない【24】聞き入る【2】ケータイ使わない・あっというまにおわる
楽しい【19】退屈しない【4】笑顔・遊び心・教室のテンションが高い	26	21.0	**楽しい**	21.0	33	楽しい【31】笑いがある・ドキドキ、ワクワク
面白い【23】ユーモア・あきない	25	20.2	**面白い**	16.6	26	面白い【20】飽きない【5】先生にユーモアがある
私語がない【9】静か【5】	14	11.3	**静か**	8.9	14	私語がない【11】静か【3】
雰囲気が良い【4】授業を妨げるものがない・先生と生徒の距離が近い…	10	8.1	**雰囲気がいい**	9.6	15	雰囲気が良い【11】皆が勉強に向かおうという雰囲気が出ている…
明るい【3】積極的【3】授業、教師、生徒全体の雰囲気が明るい	7	5.6	**明るい**	6.4	10	明るい【5】明るい雰囲気【3】活気がある【2】
基礎セミナーの雰囲気カテゴリーの総件数【124】			**専門日本語の雰囲気カテゴリーの総件数【157】**			

「集中」「楽しい」「面白い」の各コードは、「授業内容」に集中し、楽しく、面白い内容と考えれば、前項の＜表４＞「授業内容」カテゴリーに分類することもできるが、回答内容の記述から判断して、＜表５＞「雰囲気」カテゴリーに入れた。

＜表５＞の「雰囲気」カテゴリーをグラフに表すと次の図４になる。

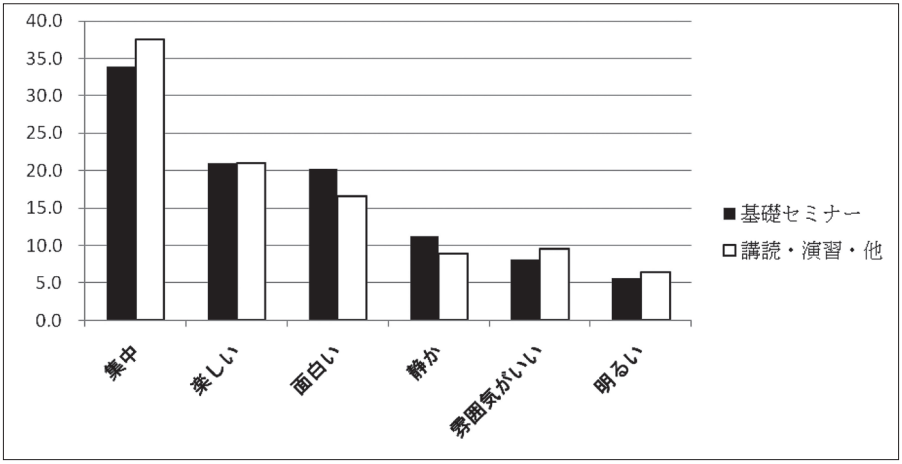


図４.「雰囲気」カテゴリー

＜表５＞の「雰囲気」カテゴリーに関しては、基礎セミナーが124件で、全体の第三位を占めているのに対し、専門日本語は157件で、全体の第２位を占めている。専門日本語の方はいい授業の条件として「雰囲気」の割合が高く、関心が高いと言える。

「雰囲気」カテゴリーの中で、「集中」コードは、基礎セミナーが33.9％で、専門日本語が37.6％と、共通して首位である。両者とも、集中できる授業が望ましいとしている受講生が多い。

第２位に来るのは「楽しい」コードである。基礎セミナーも専門日本語も21.0％と同等の比率を占めている。両者とも、楽しい授業が期待されていると言える。

「面白い」コードに関しては、基礎セミナーが20.2％で、専門日本語は16.6％と、大きな差が見られなかった。しかし、「面白い」コードは上位３位に来ていることから、面白くて、飽きない授業が望ましいと思われる。

＜表５＞の各コードを見ると、集中できる授業といい、楽しい授業や面白い授業といい、皆雰囲気のいい授業だとまとめられるかもしれない。しかし、得られた記述の中で、「集中」「面白い」「楽しい」などのように細かく、特定の一つのコードにまとめられない項目があるため、「雰囲気がいい」という別コードを作った。「雰囲気がいい」のコードの中には、基礎セミナーの回答に「先生と生徒の距離が近い」という記述があった。専門日本語の方には、「整った学習環境」や「皆が勉強に向かおうという雰囲気が出ている」のように、学習環境に関する記述が見られた。

「静か」「明るい」の二つのコードに関しては、両者の間に大きな差は見られなかった。

＜表５＞「雰囲気」カテゴリーに関して、各コードでは、両者に大きな差異が見られなかったが、上位3位に来ている「集中」「楽しい」「面白い」が大いに期待されていると分かった。

５－５.「教師」カテゴリーの分析

教師に関する回答内容を以下の＜表６＞と図５に示す。

＜表６＞　教師カテゴリー

基礎セミナーの回答内容	実数	比率	コード	比率	実数	専門日本語の回答内容
質問に丁寧に答えてくれる【6】平等【2】延長しない【2】先生に熱意がある【2】先生が注意してくれる・生徒への理解がある・先生の自己満足ではない・生徒と同じ目線になってくれる・…	31	44.7	態度	32.8	20	教師に熱意がある【4】理解しているか確認してくれる【4】身になる【2】生徒の目線【2】教師に熱意がある【2】教師が生徒の目を見ている・アドバイスしてくれる・先生が生徒をバカにしない…
声が聞きとりやすい【8】先生の声がはっきり聞こえる【5】声が大きい【4】先生がはきはき喋る・ちょうどいい声量（教師側）・話をするテンポが良い…	23	32.4	声	45.9	28	先生の声が聞きとりやすい【17】声が大きい【9】話し方が明瞭・声のメリハリがある
適度に厳しい【5】まじめ【2】教師に親しみが持てる・ひとりよがりでない・いい教師・教師に親しみが持てる・先生の愛想がよい…	10	14.1	性質	16.4	10	教師の人柄【3】堅苦しすぎない【2】先生が厳しすぎない・厳しさ・先生がよい先生・利不尽でない・好意を持てるような先生
ボケたら退職・話し上手…	7	9.9	その他	4.9	3	先生の知識が深い【2】指示が適切
基礎セミナーの教師カテゴリーの総件数【71】			専門日本語の教師カテゴリーの総件数【61】			

＜表６＞の「教師」カテゴリーをグラフに表すと次の図５になる。

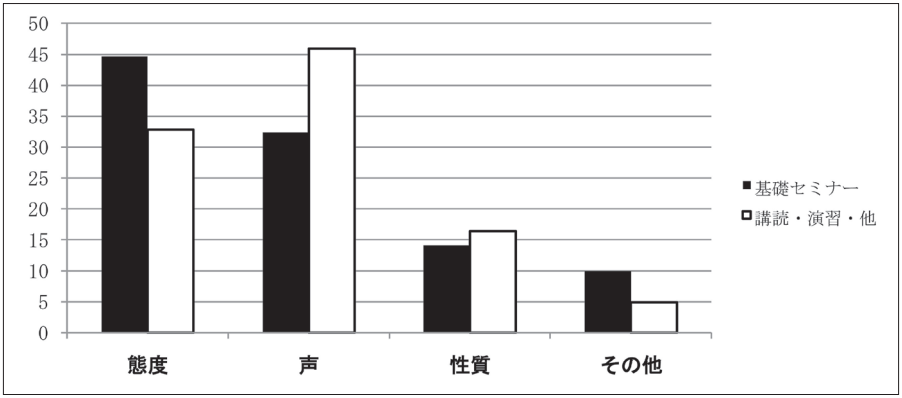


図５.「教師」カテゴリー

＜表６＞と図５に示した「態度」コードでは、基礎セミナーが44.7％で、専門日本語の32.8％より、11.9ポイント高い。教師がどんな姿勢で授業と向き合うのかは初年次生の方がより重視している。いずれも30％以上の比率を占めていることから、教師の態度が重視されていると言える。教師の授業に対する姿勢は、学習者の授業態度に関係してくるのではないかと思われる。

しかし、初年次生の回答では、専門生にない「平等」の記述が得られた。一方で、専門生の回答では、「アドバイスをしてくれる」という記述があった。両者ともある程度教師の態度を要求していると思われるが、具体的に求めているものがそれぞれ異なっている。

「声」コードに関しては、基礎セミナーが32.4％を占め、第２位となっているのに対し、専

門日本語が45.9％と、首位を占めている。専門日本語が基礎セミナーより、13.5ポイント上回っている。両者とも30％以上を占めていることから、教師の声が聞きとりやすい方が望ましいと考え、期待されていると言える。しかし、専門日本語の方が聞きとりやすい声で授業をする教師をより強く求めていると言える。

「声」コードの中には、「話し方が明瞭」という回答があった。授業で、教師の話し方ははっきりしていなければ、何をやっているのかをも理解できなくなってしまうため、重要な要素だと思われる。また、「先生の声が聞きとりやすい」の回答も同様であり、教師が何を話しているのか聞き取れなければ、ノートも取りにくく、授業内容に興味も失ってしまうであろう。

神奈川工科大学（2005）『教育開発センターニュース』には、「ここでは授業において最も基本的な『教員の声の大きさ』『黒板の字の読みやすさ』について考えてみる。この二つは授業の第一歩であり、原点であり、授業の成否がかかっていると言える」との記述が見られる。

また、神奈川工科大学（2005）『教育開発センターニュース』は、「授業時に『先生の声が聞こえる』かどうかは授業の根幹である。たとえ教室の条件が悪いにしても、教員の声が聞こえないのでは授業内容を理解することを望むべくもない」としている。

教師が授業をするにも、学習者とのコミュニケーションをはかるにも、授業への熱意を表すにも、大きくて聞き取りやすい声が必要である。特に、多人数の講義では、教室も広く、時々私語もあったため、大きく、聞き取りやすい声で授業をすることはさらに重要性が増す。また、情熱の入った声が受講者の熱意を引き出し、学習意欲を喚起する効果もあるだろう。

「性質」コードには、基礎セミナーが14.1％で、専門日本語の16.4％とほぼ同等の比率を占めている。両者の回答により、教師の人柄に注目し、適度の厳しさを求めていることがわかる。

「その他」に関しては、専門日本語に教師の深い知識を要求している記述もあった。

５－６．その他の分析

その他カテゴリーに関する記述は次の＜表7＞の通りである。

＜表７＞その他

区分	回答内容	合計
基礎セミナー	宿題が出ない【3】課題宿題が出る【2】寝ててもOK【2】単位がもらえる【2】好き・換気がしてある・出席関係ない・楽・当てられない・出席をとる・多すぎない宿題・小テストがある・レポートが頻繁に出される・感動する・名誉教授の授業・授業中に寝ている生徒を先生が注意する	21
専門日本語	自由がある・授業後に達成感がある・室温が適切・体育・心に残る・気になる	6

基礎セミナーの回答内容には、「宿題が出ない」「寝ててもOK」「単位がもらえる」「多すぎない宿題」と楽に単位をもらえると望んでいる学習者がいる一方で、「課題宿題が出る」ことを望んでいる学習者もいた。また、「出席関係ない」という期待がある一方で、「出席をとる」ことを要求している学習者もいた。基礎セミナーの方は、「単位がもらえる」や「出席」に関する記述も得られた。「小テストがある」や「レポートが頻繁に出される」のように、積極的な学習姿勢を持っている学習者もいた。

6．自由記述による分析

マインドマッピングから得られたデータだけではなく、アンケート用紙の自由記述欄から得られた内容を質的研究方法の一つであるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（grounded theory approach）を用いて談話分析した。

戈木（2006）は、グラウンデッド・セオリー・アプローチを以下のように定義している。

> グラウンデッド・セオリー・アプローチは、データに基づいて（grounded）分析を進め、データから概念を抽出し、概念同士の関係づけによって研究領域に密着した理論を生成しようとする研究方法です。ただし、グラウンデッド・セオリーでいう理論は、一般に想像されるような仰々しい理論ではなく、データから抽出した複数の概念（カテゴリー）を体系的に関係づけた枠組みのことです。

次に示す表中の「番号」は、コンピュータでEXCELを用い、データ入力の順番を示すもので、人物を特定するものではない。無記名式のアンケートのため人物を特定することはできないが、同一人物の記述を分けて入力する場合は、以下＜表８＞の12(1)、12(2)、12(3)、12(4)という具合に(　)内に連番でつながりを示した。一文しか記述していない場合も01(1)や02(1)のように記号化した。「データ」の部分は、アンケートの自由記述の部分をほぼ一文単位に区切って入力した。ただし、二つの内容が含まれている文には、例外的に一文を前件と後件に分けて入力した場合もある。

「所属」（注１）は、回答者の所属を示し、「属性」は学年や性別を示した。「科目」（注２）は回答者が参加した授業を示した。「ラベル」はデータのキーワードを示した。

「日本語学講読」と「日本語学演習」においてのみ自由記述が得られたため、分析の対象とした。また、プライバシー保護のために、表中で表した教師の名前をアルファベットの記号で示した。

注１：所属は表を分かりやすくするため、表中で略語を示す。略した所属の全称は以下の通りである。

日文：人文学部・言語文化学科・日本語学・日本文学コース

言情：人文学部・言語文化学科・言語情報学コース

注２：スペースの余裕がないため、科目を表中で略語を示した。略した科目の正式名称は以下の通りである。

講読：日本語学講読　　演習：日本語学演習

＜表８＞自由記述の切片化の例　（n＝4）

番号	データ	所属	属性	年齢	科目	ラベル
12(1)	先パイとプリントを交換して、集中できる雰囲気や…	日文	２年女性	10代	演習	集中
12(2)	…会話がある授業だと「いい授業」になるということが一致していました。	日文	２年女性	10代	演習	会話

12(3)	違いとしては、自分のは先生に対していっていることが多かったのですが、	日文	２年女性	10代	演習	教師の行動
12(4)	先パイは、活発に発言する等生徒目線が多かった。	日文	２年女性	10代	演習	発言

６－１．雰囲気について

雰囲気に関する自由記述を以下の＜表９＞に示す。

＜表９＞「雰囲気」カテゴリー　（ｎ＝２）

番号	データ	所属	属性	年齢	科目	ラベル
11(1)	「集中できる」や「私語が少ない」等、学びやすい環境が整っている方が「いい授業」だと感じると思います。	日文	３年女性	20代	演習	学習環境
12(1)	先パイとプリントを交換して、集中できる雰囲気や…	日文	２年女性	10代	演習	集中

上記11(1) のように、「集中できる」や「私語が少ない」等の要素が、学びやすい環境が整っている条件として挙げられている。＜表５＞の「雰囲気」カテゴリーで首位となっている「集中」のコードに一致しており、やはり、私語が少なく、集中できる学習環境が大いに期待されている。12(1) も「集中できる雰囲気」に関する記述である。

６－２．教師について

教師について述べたものを以下の＜表10＞に示す。

＜表10＞「教師」カテゴリー　（ｎ＝４）

番号	データ	所属	属性	年齢	科目	ラベル
01(1)	“よい授業”にするには先生の行動にかかっているものが多いようでした。	日文	３年女性	20代	講読	教師の行動
02(1)	生徒というよりも、先生に求めることが多いと思った。	日文	３年女性	20代	講読	教師の行動
12(3)	違いとしては、自分のは先生に対していっていることが多かったのですが、	日文	３年女性	10代	演習	教師の行動
14(2)	その授業をする教師の態度（声が大きい・説明が分かりやすいなど）も含めて、いい授業かどうかが決まるのではないかと思いました。	日文	３年女性	20代	演習	教師の態度

上記01(1) や02(1) のように、教師側が「いい授業」をする鍵を持っているとの記述があった。01(1) の「“よい授業”にするには先生の行動にかかっているものが多い」や、02(1) の「生徒というよりも、先生に求めることが多い」のように、教師がいい授業をするために、どのような心がけが必要であるか、どのように工夫して行くのかが注目されている。

14(2) は教師の態度に関する記述である。記述の中では、「声が大きい・説明が分かりやすいなど」が含まれており、＜表６＞の上位２位に来ている「声」コードや＜表３＞の首位を占めている「分かりやすい」コードと一致している。

12(3) は記述者とペアの相手との回答の違いを述べており、様々な意見があったようである。

６－３．受講者について

授業の参加者について述べたものを以下の＜表11＞に示す。

＜表11＞「受講者」カテゴリー　（ｎ＝３）

番号	データ	所属	属性	年齢	科目	ラベル
03(1)	前回の教師に求められるものでは、「教師」にのみ要求があったけど、「授業」に求められるものだと、「教師」だけではなく「受講者」にも求められるものがある。	日文	２年女性	20代	講読	受講者
10(1)	発表する立場で書いたのですが、参加者が入れる発表づくりができれば良いと思います。	日文	４年女性	30代	演習	参加者
13(1)	「いい授業」には教える立場にいる人の工夫のみならず、授業をきく側がどのような心がけで臨むかということも関わってくると思います。	言語情報	４年女性	20代	演習	受講者

上記03(1) や13(1) では、「いい授業」をするには単に教師側の問題だけではなく、受講者側にも努力が要求されていると解釈できる。13(1) は、「『いい授業』には教える立場にいる人の工夫のみならず、授業をきく側がどのような心がけて臨むかということも関わってくると思います」と述べており、「いい授業」が成立するためには、教師と学習者双方の心がけが関わっていると指摘している。

確かに、教師がどんなに熱心に講義をしていても、回りの環境で学習者が真面目に受けられないなら意味がない。受講者の側もしっかりと授業を受ける体制を整えて、教師に最適の授業環境を作るように努力すべきであろう。

６－４．参加型について

参加型について、二つのカテゴリーに分けて示した。それぞれは「発言」カテゴリーと「相互性」カテゴリーである。

＜表12－1＞「発言」カテゴリー　（ｎ＝４）

番号	データ	所属	属性	年齢	科目	ラベル
04(1)	高校までの授業は、先生からの一方的な説明に終始していたのですが、H先生の授業を受け始めて、自分の意見を発表しなければならないので、ボーっと授業を聞くことがなくなりました。	日文	４年女性	20代	講読	発表
09(1)	一方的な授業では飽きてしまうので、生徒が発言できる授業がいいと思います。	日文	３年女性	20代	演習	発言
12(2)	会話がある授業だと「いい授業」になるということが一致していました。	日文	２年女性	10代	演習	会話
12(4)	先パイは、活発に発言する等生徒目線が多かった。	日文	２年女性	10代	演習	発言

上記04(1)のように、「高校までの授業は、先生からの一方的な説明に終始していたのですが、H先生の授業を受け始めて、自分の意見を発表しなければならないので、ボーっと授業を聞くことがなくなりました」と述べている。09(1) も、「一方的な授業では飽きてしまい、生徒が発言できる授業がいい」と指摘している。

12(2) や12(4) では、記入者が授業中でペアの相手と検討した上で、「会話がある授業だと『いい授業』になるということが一致していました」や「先パイは、活発に発言する等生徒目線が多かった」という記述となっている。

上記の自由記述の内容は、＜表３＞の「教授法」カテゴリーで示したように、上位に来ている「対話」コードや「参加型」コードの結果と一致している。

＜表12−2＞「相互性」カテゴリー　（ｎ＝２）

番号	データ	所属	属性	年齢	科目	ラベル
07(1)	双方向の授業	日文	２年女性	20代	演習	双方向
08(1)	この授業は先生が一方的に話す授業ではないので、教師や学生や発表者が一方的に頑張ればいいのではなく、双方が活発に活動することで、いい授業に近づくのではないかと思いました。	日文	４年女性	20代	演習	相互的活動

上記07(1) と08(1) が授業の相互性に関する記述である。＜表12−2＞の08(1) は、「この授業は先生が一方的に話す授業ではないので、教師や学生や発表者が一方的に頑張ればいいのではなく、双方が活発に活動することで、いい授業に近づく」と記述しており、教師からの一方的な授業ではなく、相互的に活動する双方向の授業が期待されている。

６−５．その他について

＜表13＞「その他」カテゴリー　（ｎ＝６）

番号	データ	所属	属性	年齢	科目	ラベル
05(1)	いい授業というのを考えるのがすぐに思いつかなかったですが、色々な授業を思い返したみるといろいろと考えることができました。	日文	２年女性	10代	講読	考える
06(1)	発表者側は、考えが偏ってしまわず、新たな視点が得られる授業が有意義な授業だと思います。	日文	４年女性	20代	演習	新視点
06(2)	発表を聞く側は、問題発見能力が身に付けられる授業だといいと思います。	日文	４年女性	20代	演習	問題発見能力
13(2)	ただ、教える立場の人がきく側の意欲を引き出す工夫をすることはとても重要だと思います。	言語情報	４年女性	20代	演習	意欲
09(2)	また、わかりやすく、いろいろな知識を得られる授業がいい授業だと思います。	日文	３年女性	20代	演習	知識
14(1)	授業内容が興味深いというのは当然必要とされることだけれど、…	日文	３年女性	20代	演習	興味深い内容

「その他」に関しては、＜表13＞に示したように、「考えることができる」「新たな視点が得られる」「問題発見能力が身に付けられる」「聞く側の意欲を引き出す」等のような授業が期待されていることが分かる。

特に「考える力」と「問題発見能力」が社会人基礎力の一つとして注目すべきであろう。社会人基礎力とは、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の３つの能力（12の能力要素）から構成されており、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基

礎的な力である。マニュアルなき時代を生き抜き、新たな価値を創造していくために、学校は、単に知識を伝達するだけではなく、授業を通して社会人基礎力を養うことも現在の課題ではないかと思われる。

7．まとめと考察

＜表14＞まとめと比較

順位	基礎セミナー	数	専門日本語	数
1	「教授法」カテゴリー	209	「教授法」カテゴリー	197
2	「授業内容」カテゴリー	139	「雰囲気」カテゴリー	157
3	「雰囲気」カテゴリー	124	「授業内容」カテゴリー	147
4	「教師」カテゴリー	71	「教師」カテゴリー	61

＜表14＞に示したように、基礎セミナーの調査結果と専門日本語の調査結果において、それぞれの順位の上で差異が見られた。

アンケート調査結果から見ると、両者とも第1項目となっているのは「教授法」カテゴリーである。基礎セミナーに参加する初年次生も、専門日本語の授業に参加する２年次以上の専門生も、「教授法」に重きを置いている。

大学の授業で、多人数で授業を行う場合が多く、自然と教師が参加者一人一人に目を向けることが難しくなっている。知識伝達型の授業においても、どれ程参加者に知識を伝えられたか、どの程度身に付くかに関して、効果的な教授法の検討が重要だと考える。

初年次生は高校から大学に入ったばかりで、大学でどのような授業があるか、どのようなことが学べるのかと、期待している状態にあると推測できる。したがって、今までに受けたことのない大学の授業に興味が湧き、大いに期待しているのではないかと考える。

専門生のアンケート結果を見ると、「雰囲気」と「授業内容」カテゴリーの回答数には大きな差はないが、順位上で初年次生と逆転している。専門生も「授業内容」を重視しているが、授業全体に影響を与える「雰囲気」に着眼している。

第４項目になっているのは、両者とも「教師」カテゴリーである。やはり、授業の実施者より、授業自体が注目されているようである。

＜表14＞を見ると、自由記述から得られた「受講者」カテゴリーはマップ調査の回答にはなかった。自由記述はマップ調査の回答への補足説明でもある。マップ調査では、ただ思いつく言葉や発想などを簡潔に書き込んでいる。その言葉を文章に変えることで、回答者のより具体的な考えが読み取れる。「受講者」についての自由記述によると、いい授業をするには、教師側の行動のみならず、授業を聞く側の協力も求められている。自由記述の＜表12－2＞「相互性」カテゴリーに見られるように、教師と学生及び学生と学生との双方向的で、活発な活動が期待され、＜表12－1＞「発言」カテゴリーと関連している。両者ともにマップ調査から得られた＜表３＞「教授法」カテゴリーの「参加型」「対話」コードと関連し、結び付いている。

「教授法」「授業内容」「雰囲気」「教師」「受講者」が互いに影響を与え、密接に関連している。

「いい授業」をするには、いずれも欠かせない要素であり、必要な条件だと考える。

８．今後の課題

本稿では、日本人に「いい授業とは?」を中心テーマとして、マップ調査を行ったが、違う国の文化を持っている留学生には、どのような授業がいい授業なのかについても、調査し、分析を行いたい。

本稿の調査結果には、「教材」や「資料」などに関する回答も得られた。今後の課題としては、「いい教材とは?」を中心テーマとしたマップ調査を実施し、分析・検討を試みたい。ただ受動的に教材を使っている学習者が、どのような教材に高い評価を与えているのかを調査し、検討していきたい。

本調査の自由記述から受講者に関する回答も得られた。授業は教師一人だけの舞台ではなく、いい授業をするには、受講者の行動も関わってくると思われる。いい学習者にはどんな条件と要素が必要なのかを検討するために、「いい学習者とは?」を中心テーマとしたマップ調査も行いたい。違う立場の学生と社会人がそれぞれ持つ望ましい学習者像を検討したい。

【謝辞】本発表にあたって、アンケートにご協力いただいた方に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

田中耕治（2007＝2008）『よくわかる授業論』ミネルヴァ書房

市川伸一（2008＝2009）『教えて考えさせる授業を創る』図書文化

神奈川工科大学（2005）『教育開発センターニュース』特集「より良い授業を目指して」

法政大学・ＦＤ推進センター(2006)『第１回ＦＤ研究会報告』「教員の考える『いい授業』・学生の考える『いい授業』」

戈木クレイグヒル滋子（2006）『グラウンデッド･セオリー･アプローチ　理論を生みだすまで』新曜社

Wycoff, J（1991）Mindmapping The Berkley Publishing Group(=邦訳：『マインドマッピング』吉田八重訳（1994）日本教文社）

Buzan,T & Buzan、B(1993)THE MIND MAP BOOK. BBC BOOKS(=邦訳:トニー･ブザン著、田中孝顕訳（1996）『これが驚異のマインド・マップ放射思考だ!!』騎虎書房）

佐々木翔太郎（2008）「日本と中国における『鬼』のイメージの差異について」『平成20年度日本語教育学会・第10回地区研究集会予稿集』pp. 14-23

陳仲鵬（2009）「日本語と中国語の同形語＜先生＞について」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第32号、pp.152-166

許恵玉（2009）「『日本文化』と『中国文化』のイメージ比較研究」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第32号、pp. 136-150

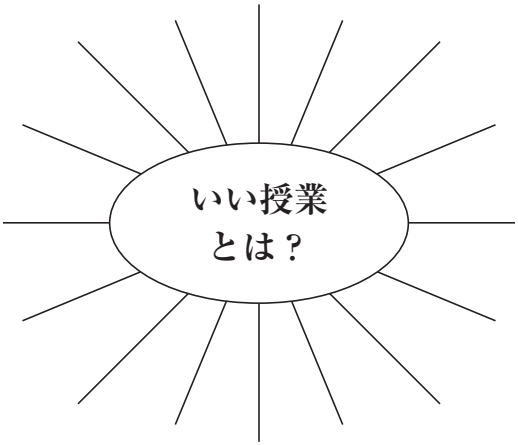
林伸一・衛蕾（2010）「中国人学習者が求める日本語教師像―マインド・マップ調査に基づく考察―」『山口大学文学会志』第六十巻、pp.39-59

（エイ・ライ、はやし・しんいち）

＜別添資料＞

アンケート調査

あなたにとって「いい授業」とはどんな授業でしょうか？思いつく言葉やイメージ、表現などを次のマインド・マップに書き入れてみてください。



何かご意見があれば語記入下さい。

◎国籍（　　）　出身地（　　）都道府県　　◎性別（男･女）
◎年齢（10歳代・20歳代・30歳代・40歳代・50歳代・60歳代・70歳代～）
◎参加授業科目名（　　）　◎学年（　　）年　　◎（　　）学部
◎所属コース名（　　）

ご協力ありがとうございます